

解題

小澤 実

ここに掲載した英文原稿とその翻訳計3本は、2008年4月10日から17日まで京都大学大学院文学研究科の服部良彦教授を受け入れ教員として来日され、東京と京都に滞在されたコペンハーゲン大学教授ニルス・ヒューベルの講演原稿である。第1原稿は「The Writing of Medieval History from a National Perspective」、第2原稿は第1原稿の翻訳である「ネイションから見た中世デンマーク」、第3原稿は「デンマークにおける宗教施設と大所領の創設：10世紀から13世紀」である。このうち第1原稿は、4月12日午後2時より、服部教授の主催により京都大学文学部新館2階第2演習室において開催されたヒューベル教授講演会で読み上げられたペーパーである。他方第3原稿は、今後出版されるある論集に収録される論考である¹。当初4月16日に開講された服部ゼミにおいて読み上げることを意図していたが、内容が高度に専門的ということもあり、別の論題に置き換えられた。しかしながら、日本ではこれまで紹介されたことすらない中世デンマークの社会経済史に関する論考であり、ヒューベル氏も翻訳されることを望んだので、ここに掲載する次第である。

ニルス・ヒューベル氏は、1948年にデンマーク首都コペンハーゲン近郊のグロストロップ村に生まれた。いわゆる68年の世代であるが、パリ5月革命の時に学生であったわけではない。彼は高校卒業後の1966年にコペンハーゲンにあるモーターシップス・エージェンシーズ社に就職し、1969年に兵役を務め、1970年から73年まで、世界的な運送企業シェンカー社に勤務した。ヒュー

ベル氏がロスキレ大学センターに入学したのは1973年、すでに25歳のときである。大学世界の中でのみキャリア・ステップを積むのが常道である北欧の中世史家としては、きわめて特異な経歴と言わねばならない。

ヒューベル氏は1980年に修士号を取得した後、オーフス大学に籍を移し、一方ではデンマーク国立研究会議から奨学金を取得し、他方では様々な大学で教鞭をとりながら、1989年に博士論文を完成させた。博士論文の対象は中世末期のイングランドであり、審査委員は、オーフス大学教授エリック・ウルシイ（Erik Ulsig）、オーデンセ大学教授エアリン・ラゼビ・ペターセン（Erling Ladewig Petersen）、そしてイェテボリ大学教授トマス・リンドクヴィスト（Thomas Lindkvist）がつとめた。いずれも中世から近世にかけての経済史の重鎮である。その博士論文は同年オーフス大学出版局より、『危機か変化か。中世末期イングランドの農村構造の再編より見た危機の概念』として出版された²。その後ヒューベル氏は、中世後期経済史の専門家として数多くのモノグラフを専門誌に公表し、すでにデンマークを代表する経済史家として誉れ高い。たとえば、デンマーク中世経済の生産局面や流通局面を扱った「デンマークにおける大規模生産の成立」³、「中世デンマークにおける土地所有、農業、農民」⁴、デンマークを北ヨーロッパのコンテクストの中に置きなおす「1350年以前における北ヨーロッパの穀物交易」⁵は、すでに当該分野における基本文献としての役割を果たしていると言えるだろう。

しかしながらヒューベル氏の研究は、21世紀

に入ってから飛躍する。1 つは、中世前期デンマークの野心的な通史である『ヨーロッパの中のデンマーク』(2003年)の刊行である⁶。ナショナル・ヒストリーとしての「デンマーク」の自明性を問い直す本書は、その刊行直後より、デンマーク中世史家の間で大きな議論を巻き起こした。コペンハーゲン大学のヴァイキング時代の専門家ニルス・ロン(Niels Lund)教授とは、とりわけハーラル青歯王の位置づけを巡って、デンマークを代表する歴史学専門誌『歴史学雑誌』上で激しいやり取りを繰り返し、なお双方矛を収める気配はない⁷。966年に発給されたオットー大帝の国王証書に記載される「in marca vel regno Danorum」という文言に、10世紀のデンマークをドイツの実質的「辺境伯」である可能性を読み取るヒューベル氏の解釈は確かに独創的ではあるが、それはデンマークの独立性を信じる旧来の歴史家からは受け入れ難いものと映るだろう。

もう1つは、オーフス大学のピョーン・プルセンとの共著である『デンマークのリソース』(2007年)の刊行である⁸。すでに講演でも述べているように、本書はデンマーク中世の経済を通覧した、驚くべきことに初めての著作である。確かにこれまでデンマークにも社会経済史の専門家——例えばエリック・ウルシヤポウル・エネマルク——は少なからずいた。しかしながら彼らは重要なモノグラフを残しはしたが、必ずしも総合的な著作をまとめたわけではない。ヒューベル氏の言うように、やはり社会経済史家であったエリック・アロップによる百ページにも満たない短い通史が、唯一の総合的記述であった⁹。そのようなデンマークにおける歴史記述の伝統を踏まえてみるならば、『デンマークのリソース』がいかに画期的な著作であるかがわかるだろうし、さらに言えばそれが英語で執筆されていることから、今後全世界の中世経済史や中世北欧史研究の基本書として参照されるであろうことも容易に予想がつく。

ここに紹介する2本の原稿は、以上のような研究経歴をもつヒューベル氏の精髓でもある。最初の「ネイションから見た中世デンマーク」は、ヒューベル氏が近著『ヨーロッパの中のデンマーク』で提起した議論を中心に、「デンマーク」という

国名の内包する構築性を、必ずしもデンマーク中世史に明るくない日本人にむけて、よりわかりやすく組みなおしたオリジナル原稿である。注釈で引用するパトリック・ギアリやワルター・ポールが精力的に推し進めてきた初期中世のネイション構築論をデンマークという事例に適用するという点で、きわめて斬新である。90年代以降の初期中世研究の柱のひとつであるこの議論は、国家形成が遅れ独自アイデンティティの模索を急務としたように見えるヨーロッパの「辺境」でこそ適用されてしかるべきであったが、これまで北欧諸国ではなぜか論じられることがなかった。なぜなされなかったのかという問いに対する回答はいくつかあるが、一つは史料が貧しいことであり、もう一つは、ヒューベル氏が鋭く指摘するように、ナショナル・ヒストリーの伝統である。ローマ解体以降から中世盛期にいたるまでの「国」名の含意と、それ以降の時代の含意を同一視してはならないというのはすでに常識であり、それはドイツ以前の「ドイツ」ネイションの構築プロセスを克明に論じた、ドイツの中世史家ヨハンネス・フリートの名著『歴史への道』の序章に範を求めることができる。

もう一つの「デンマークにおける宗教施設と大所領の創設：10世紀から13世紀」は、第1論文の後半で正当化した中世デンマークという枠組みの中で、教会や修道院といった宗教施設が大所領の形成にどのように関わってきたのかを跡付ける秀抜な論文である。キリスト教は単にイデオロギーのみならず、従来の生活を根本的に変革する農業システムをデンマークにもたらした。デンマークに限らずスカンディナヴィア世界は、ブリテン諸島や大陸に比べればきわめて貧しい歴史史料しか有しておらず、それは様々な歴史事象の再現を困難としてきた。経済史とて例外ではないが、ヒューベル氏の議論は従来のデンマーク中世史では提示されることのなかった様々な可能性を示唆している。ただし、確かにヒューベル氏が述べるように教会組織がデンマークに流入する以前、デンマークに大土地所有の具体的痕跡を史料上に認めることはできないかもしれないが、土地所有とそれを巡る争いが盛んであったことは周知の事実である。ヴァイキング時代にはルーン石碑が土地所

有のしるしであったとするビルギット・ソーヤーの見解もあるし¹⁰、また解題者も所有権確認がルーン石碑から国王証書へ移行するプロセスについて論じたことがある¹¹。宗教組織の革新性をヒューベル氏が論じるほど高く評価できるかどうか、今後検討しなければならない問題である。

このようなヒューベル氏の業績を日本に紹介するという行為は、それ自体中世史学の可能性を拓くという点で意味のあることであろう。しかしながら、日本における中世デンマーク研究の現状を振り返るに、この講演原稿の持つ意味はいつそう明確となる。デンマークは、欧州の大国とは異なり、日本とはさほどの規模の経済的関係を持たない「辺境」の小国であるためか、そしてまたデンマーク語という言語の特殊性ゆえか、必ずしも日本では十分に紹介されてこなかったし、研究者も、とりわけ前近代に関しては満足のいく質と量に達しているわけではない¹²。教科書や専門書においても、せいぜいヴァイキングやカルマル連合といった言葉が表面的に触れられている程度であり、デンマーク本国で関心の高い中世盛期や後期については紹介すらされていない。日本の中世史家でヴァルデマー大王の事績を知る者がいったいどれほどいるだろうか。私の知る限り、日本語で読むことのできるデンマーク中世の実情を伝える唯一の論考は、かつて来日したキール大学名誉教授のトマス・リース (Thomas Riis) による3本の講演のみである¹³。ヒューベル氏の論考は、リース教授の来日以来進展したデンマーク中世史研究の一端を反映しており、日本の学会の抱える知的ギャップを埋める一助となるだろう。

なお、2稿の翻訳は、いずれも訳者の専門とは必ずしも重ならないため、難渋を極めた。そのさい、中世スペインの社会経済史を専攻する村上司樹 (大阪市立大学文学研究科グローバル COE 研究員) と、中世スカンディナヴィア教会史を専門とする成川岳大 (東京大学大学院文学研究科博士課程) から有益な助言を頂いた。ここで謝意を表したい。また、明らかに誤りと思われる年代や記述も、特に断りなく修正した。もちろん訳語や解釈の最終的な判断は訳者によるものであり、印刷に付されたこの訳稿に誤りがあつたとすれば――

それは少なからずあるだろう――、言うまでもなくその責任はひとえに訳者個人に帰される。

以上は公的な情報に基づくヒューベル氏の業績回顧であるが、ここからは、私が本人に接した範囲での印象を記そう。ヒューベル氏は、コペンハーゲンから東京に到着した10日と11日、旧知の仲であった早稲田大学大学院文学研究院の村井誠人教授の私宅に滞在し、しばし東京観光を愉しんだ。12日、村井教授に新幹線で送り出されたヒューベル氏を京都駅で迎えた私は、大学へ案内するタクシーの中で、大学到着後は服部教授が準備してくれた昼食会で、講演後はやはり服部教授が準備してくれた晩餐会で、硬軟取り合わせた様々な話をする事ができた。さらに翌日13日には、ヒューベル氏を二条城と清水寺に案内し、一日を共にするという稀有な機会にも恵まれた。ヒューベル氏は実に好奇心旺盛な人物であった。それはもちろん学問上のトピックに対してもそうであるが、日本で眼に入るあらゆることに関心を持っていたかのようなのである。自然景観、山林の空気、家屋の構造、庭園の設え、学生の制服、満員電車、社会保障制度など、これはと思う問題を矢継ぎ早に質問する。それはおそらくデンマークと日本の差を敏感に感じる社会経済史家としての彼の知性のなせる業であろう。

なおヒューベル氏は、今後社会経済史とは異なる新しいテーマに移ると言う。彼は酒席で『デンマークのリソース』は私の社会経済史に対する遺言書 (testament) だ」という言い方をしていた。彼の言にしたがえば、デンマークでは今や社会経済史は途絶えつつあり、学生の関心は文化史に集中しているという。今の日本にも似たような傾向があるように感じるが、デンマークはいわゆるアナール派に熱狂したことはないため、現在の文化史の隆盛は日本とは異なる文脈で興ってきたのであろう。何も文化史が悪いというわけではないが、法制史や社会経済史のテーマが枯渇しているわけではないし、初期中世史においてはむしろ盛んになりつつあるので、私もヒューベル氏と同じく現在の潮流にはいささかの寂しさを感じる。とはいえ、コペンハーゲン大学のサクソ研究所には、中世後期バルト海経済史を専門とするカステン・ヤ

ンケ氏も所属しており、ヒューベル氏と共同研究も進めているようである。ヒューベル氏の不安は優秀な若手の登場で杞憂に終わると信じたい。

註

¹ Nils Hybel, "The religious institutions and the creation of large landed estates in Denmark from the tenth to the thirteenth century." in forthcoming.

² Nils Hybel, *Crisis or Change ? The Concept of Crisis in the Light of Agrarian Structural Reorganization in Late Medieval England*. Aarhus 1989.

³ Nils Hybel, "The creation of large-scale production in Denmark, c.1100-1300." *Scandinavian Journal of History* (1995). pp. 259-280.

⁴ Nils Hybel, "Landownership, farming and peasants in Denmark in the Middle Ages." in: Bas van Bavel and Peter Hoppenbrowers eds. *Landholding and Land Transfer in the North Sea Area (Late Middle Ages -19th Century)*. Turnhout 2004, pp. 187-204.

⁵ Nils Hybel, "The grain trade in Northern Europe before 1350." *The Economic History Review* 55 (2002), pp. 219-247.

⁶ Nils Hybel, *Danmark i Europa 750-1300*. København 2003.

⁷ Niels Lund, "En ny måde at skrive Danmarkshistorie på – eller torvet Isfahan?" *Historisk Tidsskrift* 104-1 (2004), pp. 218-226; Nils Hybel, "Er der én historisk metode – eller et svar til en ayatollah." *Historisk Tidsskrift* 104-1 (2004), pp. 227-228; Peter Sawyer, "anmeldelser: Nils Hybel, *Danmark i Europa 750-1300*. Museum Tusulanums forlag 2003" *Historisk Tidsskrift* 104-2 (2004), pp. 488-491; Anders Bøgh, "Fra det historiske hobbyværksted - eller Nils Hybel som Sheherazade?" *Historisk Tidsskrift* 104-2 (2004), pp. 414-422; Nils Hybel, "Svar til Peter Sawyer og Anders Bøgh." *Historisk Tidsskrift* 104-2 (2004), pp. 423-429; Anders Bøgh, "Duplik til Nils Hybels tredje eventyr." *Historisk Tidsskrift* 105-1 (2005), pp. 200-203; Nils Hybel, "Endnu et svar til Anders Bøgh." *Historisk Tidsskrift* 105-1 (2005), p. 204.

⁸ Nils Hybel and Bjørn Poulsen, *The Danish Resources c. 1000-1550. Growth and Recession*. Leiden 2007.

⁹ Erik Arup, "Die Wirtschaft des Mittelalters." in: Axel Nielsen, *Dänische Wirtschaftsgeschichte*. Jena 1933, pp. 1-79.

¹⁰ Birgit Sawyer, *The Viking-Age Rune-Stones. Custom and Commemoration in Early Medieval Scandinavia*. Oxford 2001.

¹¹ 小澤実「ルーン石碑から国王証書へ 11・12世紀デンマークにおける土地所有確認の変容」佐藤彰一編『ピエール・トゥーベール教授招聘事業報告書』(名古屋大学大学院文学研究科 2007) 11-17頁。

¹² このような認識状況は、実は北欧以外の欧米においても同じである。そのあたりの事情は、小澤実「北欧中世史学の到達点 書評: K. Helle (ed.), *The Cambridge History of Scandinavia I: Prehistory to 1520*. Cambridge: Cambridge UP 2003, xx + 872 p.]『北欧史研究』22号(2005年)45-63頁を参照。

¹³ いずれも Thomas Riis (鵜川馨訳)「デンマーク中世都市の法的・社会的問題」『立教経済学研究』32巻2号(1978年)139-158頁;「デンマークの国制 1100-1332年」『立教経済学研究』32巻3号(1978年)267-279頁;「デンマーク中世都市の類型」『立教経済学研究』33巻1号(1979年)113-144頁。